

## 巻頭言

## 骨軟部画像診断のポイント

福田 国彦

特集： Guest Editor

今や骨軟部放射線診断は画像診断医が避けて通れない領域である。1980年代初めにMRIが臨床利用されるようになってから、徐々に画像診断医が日常業務としてこの領域に足を踏み入れ始め、今では全ての画像診断医が骨軟部領域の診断を当然のこととしている。

MRIが普及し骨軟部領域の疾患を放射線診断医が扱うようになり始めた頃のことである。骨軟部放射線診断にかねてから興味を抱いていた一部の放射線科医から、そろそろ骨軟部放射線診断に興味を持つ画像診断医が集い、一般の画像診断医も参加できる研究会を発足する時期がきたのではないかという声があがるようになってきた。そのような背景の中で、片山仁先生、大澤忠先生、大場覚先生を発起人とする骨軟部放射線研究会の発足が1989年9月27日の日医放理事会で承認された。第1回骨軟部放射線研究会は、1990年1月28日に名古屋ホテルキャッスルプラザにおいて開催された。1973年に第1回研究会が開催され、長い歴史を持つ断層映像研究会に比べれば、極めてあたらしい日医放傘下の研究会である。その後、研究会の開催が重ねられ、2003年1月31日、2月1日には第14回骨軟部放射線研究会が河野敦先生の当番世話人で開催された。参加者170名を越え、骨軟部放射線診断が一般画像診断医の間にも十分に浸透してきた感がある。

今回の特集：骨軟部画像診断のポイントは、この骨軟部放射線研究会会員の執筆による。執筆を快諾していただいた先生方にこの場をお借りしてお礼申し上げたい。

『骨軟部領域の単純X線写真の重要性(鬼塚先生)』では、異常と間違われ易い正常所見が中心に述べられている。鬼塚先生ご指摘の如く、CTやMRIのみならず単純X線写真でも臨床医の相談に乗れるよう、本論文を読んだ上でNormal variationのテキストを読影室に備え、最低の基本的知識を得ておくべきである。

『骨折の画像診断(川原先生)』は、基本は単純X線写真であることを踏まえた上で、他の画像診断の果す役割について述べている。整形外科を含め各臨床医へコメントを述べる上で重要なポイントが記

載されている。

スポーツ障害の画像診断は、国民の健康志向の高まる中で画像診断医の果す役割が急速に高まっている領域である。『スポーツ障害(入江先生)』では、年齢と競技種目とに注目して、それぞれのスポーツ障害の特徴を述べている。画像診断医が知っておくべきポイントである。

『全身性疾患(過誤腫症)にみられる骨軟部病変の画像所見(唐木田先生)』では、過誤腫性全身疾患で骨軟部組織に異常を伴う疾患につき解説がなされている。いずれも比較的日常生活する頻度の高い疾患で、画像診断医が知っておかなければならないものである。

『脊椎の腫瘍性病変(藤井先生)』は、脊椎の腫瘍性病変について腫瘍、腫瘍類似疾患、感染症を広くレビューし、単純X線写真、骨シンチ、CT、MRIの果す役割を述べている。画像診断医がしばしば意見を求められる領域であり、知っておくべきポイントである。

『骨腫瘍(水谷先生)』では、全ての画像診断医が身につけておくべき単純X線写真による読影の基本的アプローチが述べられている。また、骨腫瘍におけるMRIの果す役割についても言及されている。

軟部腫瘍の画像診断はその種類の多さから大変難しい。『軟部腫瘍(青木先生)』では、読影にあたりおさえておくべき基本的事項や読影の手順と共に、画像の成り立ちに対する考察が述べられている。軟部腫瘍の診断にあたり大いに役立つと考える。

本特集は、骨軟部放射線診断を専門にしていなかった画像診断医にとって格好の総説集となったと思う。この特集を読むことで明日からの骨軟部放射線診断に役立てていただきたい。また、一人でも多くの画像診断医に骨軟部放射線診断に興味を持っていただきたいと願う。

なお、第14回骨軟部放射線セミナー(当番世話人：神戸大学、杉村和朗先生、藤井正彦先生)は神戸東急インにて2003年8月8日、9日、第15回骨軟部放射線研究会(当番世話人：大川元臣先生)は香川県民会館にて2004年1月末に開催予定である。

(東京慈恵会医科大学放射線医学講座教授)